

フリークライミングの歴史と系譜
—高度化と大衆化の視点から—
History and genealogy of free climbing
—From the aspect of the upgrade and the popularization—

スポーツ社会学研究領域 5008A058-6

目次 容子

研究指導教員 宮内 孝知 教授

I. 緒言

フリークライミングとは、安全のための確保用具のみで、技術と体力を使い、岩を登るものである。登攀のための道具を一切使わずに登ることが条件となり、使った場合はその時点でフリークライミングとはみなされず、人工登攀（エイドクライミング）となる。このふたつはどちらもロッククライミングの一種となるが、対比的な関係となる。もともとロッククライミングは登山のための手段であり、頂上に登るために通らなければならない岩壁をよじ登る必要があったことから始まっている。しかし今日では、登山というジャンルから独立し、フリークライミングが「スポーツ」としての地位を築くようになった。

フリークライミングにはいくつか種類があり、終了点にロープをかけて登る「トップロープクライミング」、登攀途中にある数個の確保支点に自分でロープをかけながら登る「リードクライミング」、ロープを使わずに低い岩を登る「ボルダリング」がある。

また近年では、クライミングウォールと呼ばれる人工の壁でのフリークライミングが注目されている。体育施設などの屋内に設置され、自然の岩場でのクライミングより安全性が高いことから、誰でも気軽に取り組むことが可能である。

フリークライミングにおいて、主な目的は、ルートや課題を完登することである。さらに、クライミングのムーヴ（動き）自体を楽しむことも重要な目的となっており、こういったクライミングスタイルをスポー

ツクライミングとも呼ばれている。

II 研究の動機・目的

高所登山のための「手段」であったフリークライミングは、それ自体が「目的」となり、スポーツとして確立してきた。こういったフリークライミングの変遷を明らかにすることは、現代のスポーツ研究において重要であると考ええる。

これまでのフリークライミングを対象にした学術論文は、「フリークライミングによるコミュニティづくり」（徳山 2008）、「フリークライマーのモチベーションとフロー経験に関する研究」（菊地 2008）、「クライマーの動機とフロー経験に関する研究」（佐藤 1996）などがある。

しかしながら、フリークライミングやフリークライミングに生じている様々な現象を体系的に論じた研究はなされていない。よって、本研究では、フリークライミングの歴史と現状を整理し、フリークライミング界に生じている現象を包括的に考察し、「競技スポーツ」、「生涯スポーツ」としてのフリークライミングの課題と展望について述べる。

III 研究方法

本研究では、フリークライミングに関する文献、先行研究を収集し、分析、考察を進めていく。特に、フリークライミングの歴史を、「競技スポーツ」「生涯スポーツ」としての2つの潮流に視点を置きながら検討していく。また、日本フリークライミング協会理事、日本山岳協会競技力推進本部役員、一般愛好者、ユース世代競技者、シ

ニア世代競技者へのインタビュー調査を行ない、資料として分析していく。

IV本論

第1章 フリークライミングの歴史

現代に通じるフリークライミングの起源は、アメリカ・ヨセミテであり、1940年代の開拓期以降、長大かつ冒険的なルートが拓かれた。ヨセミテでのフリークライミングの潮流は、日本にも伝えられ、1980年代には日本における「フリー化」の波が全国各地の岩場で起こり始めた。このような「フリー化」の流れは、当時の日本のクライミング界の閉塞状況を脱却する上で重要な意味をもった。また、1980年代後半からは、人工壁の発展に伴い、コンペティションが各地で開催されるようになった。

第2章「競技スポーツ」としてのフリークライミング

本章では、近年の競技クライミングを取り巻く変遷やルールの改訂（リード競技、ボルダリング競技）、国内大会・国際大会の現状、日本国内におけるジュニア層の育成とその課題について検討、分析した。現在の国内の主な大会は、日本山岳協会（JMA）主催のジャパンカップ（リード及びボルダリング）と、日本フリークライミング協会（JFA）主催の日本選手権（リード）、国民体育大会（山岳競技：リード及びボルダリング）がある。また、日本国内でのジュニア層の育成における課題として、①フリークライミング特有の障害―指関節障害の予防―、②クライミングコーチの育成、③トレーニングに専念できるクライミング施設の確保、④自然壁でのクライミング体験、について指摘した。特に、ジュニア層特有の障害には留意し、また、人工壁での競争だけでなく、自然壁の中でしか感じられないクライミングの魅力を若い世代のうちから感じることが、精神的な成長に結びついていくのではないかと考える。

第3章「生涯スポーツ」としてのフリークライミング

本章では、生涯スポーツ行動論としてのフロー理論、フリークライミングにおけるフロー経験の特徴、クライミングにおけるインターネットの活用、クライミングエリアにおけるトラブルについて、検討、分析した。「フリークライミング」を、「活動の結果から得られる外発的報酬を期待して行われるのではなく、活動それ自体に楽しみや満足などといった内発的報酬の獲得に価値をおく自己目的的（autotelic）な活動」として捉え、生涯スポーツとしての可能性を論じた。

第4章 考察と今後の展望

本研究では、フリークライミングの歴史を、「競技スポーツ」「生涯スポーツ」としての2つの潮流に視点を置きながら検討してきた。クライミングの「高度化」と「大衆化」により、日本人クライマーの世界大会での活躍や、クライミングに気軽に参加できる機会の増加など、クライミング界は普及発展してきた。しかしながら、ジュニア層の障害の危険性や、自然壁でのマナー問題など、それに伴う弊害も浮上してきている。今後のクライミング界の発展のためには、「フリークライミング」というスポーツに対する自らの「姿勢」を、クライマーひとり一人が見つめ直す時がきたのではないだろうか。

V. 参考・引用文献及び資料

Susan.A.Jackson,Mihaly,Csikszentmihaiy.
（著）今村浩明・川端雅人・張本文昭（訳）
（2008）「スポーツを楽しむ―フロー理論からのアプローチ」．世界思想社
菊地敏之著（2004）「我々はいかにして『石』にかじりついてきたか」東京新聞出版局
M.チクセントミハイ著；今村浩明訳（2000）
「楽しみの社会学」新思泉社
張本文昭（2000）「登山におけるフロー経験」．
野外教育研究第4巻1号：27－37．